

近藤さんの人生は、音楽と学び、そして挑戦の連続である。福岡の土地で生まれ、神戸の風を感じながら成長した彼は、幼少期から多彩な経験を積んできた。姉とともに神戸の幼稚園に通い、その後福岡に戻る。荒木という地元で小学校と中学校の日々を過ごす。この期間、彼が特に目立っていたのはボーディーパーカッションであり、その才能はテレビでも取り上げられた。しかし、音楽への情熱はそれだけに留まらず、中学生になってからはピアノに触れ、母親の影響で音楽の深い世界に足を踏み入れる。学業においても、生徒会長としてリーダーシップを発揮。遅刻の多さが教師や同級生から指摘されることもあったが、それは彼が多忙であった証拠でもある。高校に進学すると、公立の新学校で吹奏楽に打ち込む。トランペットを担当し、部長としても活動。音楽への探求心は尽きず、編曲やアレンジにも挑戦。姉のために楽譜

を書き下ろすなど、その才能は多岐にわたる。しかし、音楽家としての道は厳しい。母親や親戚が音楽で生計を立てているが、その現実は甘くない。そこで彼は、高校3年生、3年生の頃から他の可能性を模索し始める。文系クラスに所属しながらも、芸術工学部への進学を考え、物理学の勉強を始める。近藤さんの人生は、まさに多様性と挑戦の結晶である。音楽と学問、そして人々との関わりを通じて、彼は自らの道を切り開いている。それは、未来に何をもちたらずのか、極めて興味深い。近藤さんの人生における「暗黒時代」は、迷いと探求の連続であった。受験

勉強に集中できず、学校にもサボる日々。その結果、受験は失敗し、一度は浪人を選択する。この時期、彼の心は深い迷いに包まれ、何も手につかない日々が続く。家に閉じこもり、世界との繋がりを失いかけていた。しかし、バイトを始めることで少しずつ変化が訪れる。フラインマンの物理学講義を手に取り、本を読む喜びを再発見。宮台真嗣や中観哲学に触れ、自らの問題に向き合う。そして、大沢おさむの言葉に出会い、人生の目的について新たな視点を得る。ただ流れていくだけという哲学に心打たれ、人生における迷いが少しずつ晴れてい

く。深夜のバイト先で出会った人々も、彼にとっては重要な存在であった。そこにいる人々は、彼がこれから避けて通れない「現実」を象徴していた。それが、大学に進むという決断に繋がる。近藤さんの暗黒時代は、結局のところ、自己探求と成長の場であった。迷いや失敗も、その後の人生において大きな意味を持つこととなる。そして、それら全てが彼を形作る「一つの流れ」の中の出来事であったと言えるでしょう。近藤さんの大学生活は数学という厳しい領域での挑戦が続いた。暗黒時代が完全に終わったわけではなく、その影は未だに彼の心に残っていた。しかし、数学を深く学び、大学院に進むという選択をする。数学の世界は容易なものではない。特に、彼が目指していた「力学系」の分野は、非常に高度な知識と洞察力が求められる。そこで出会った人々は、破壊的なほどの頭の良さを持っていた。彼自身が一週間かけて証明した問題が、他の

暗黒時代は、  
迷いと探究の連続であった。

